

武蔵野日曜聖書講筵

光あれ

――創世記、詩篇、イザヤ、ヨハネ――

1990年1月7日

小池辰雄

伝道五十周年 「1月1日 天地の創造」 安息日 まことに結構 美わしい 光あれ キリス
トは神の光 光たれ 我は罪びとの首 召団の信仰の神髄 我はキリストの光 もっと光を！
弥陀の本願 罪びとを招かん 原点は十字架 詩「マツチ売りの少女」 祈り

【創世記1】

1 元始に神天地を創造たまえり。2 地は定形なく曠空して黑暗淵の面にあり、
神の霊水の面を覆たりき。3 神光あれと言いたまひければ光ありき。4 神光を
善と観たまえり。神光と暗を分かちたまえり。5 神光を昼と名け暗を夜と名
けたまえり。夕あり朝ありき是首の日なり。

6 神言いたまひけるは水の中に穹蒼ありて水と水を分つべし。7 神穹蒼を
作りて穹蒼の下の水と穹蒼の上の水とを判ちたまえり。即ち斯なりぬ。8 神
穹蒼を天と名づけたまえり。夕あり朝ありき是二日なり。

9 神言いたまひけるは天の下の水は一処に集りて乾ける土 顕べしと。即
ち斯なりぬ。10 神乾ける土を地と名け水の集合るを海と名けたまえり。神之
を善と観たまえり。11 神言いたまひけるは、地は青草と実麻を生ずる草蔬と
其類に従い果を結びみずから核をもつ所の果を結ぶ樹を地に発出すべしと。
即ち斯なりぬ。12 地青草と其類に従い実麻を生ずる草蔬と其類に従い果を結
びてみずから核をもつ所の樹を發出せり。神これを善と観たまえり。13 夕あ
り朝ありき是二日なり。

14 神言いたまひけるは、天の穹蒼に光明ありて昼と夜とを分かち、又天 象
のため時節のため日のため年のために成るべし。15 又天の穹蒼にありて地を
照す光となるべしと即ち斯くなりぬ。16 神二つの巨なる光を造り大なる光に
昼を司どらしめ小さき光に夜を司どらしめたもう。また星を造りたまえり。
……

【詩篇27】

1 エホバはわが光、わが救なり。われ誰をおおそれん。エホバはわが生命
のちからなり。わが懼るべきものはたれぞや。



【イザヤ30】

²⁶かくてエホバその民のきずをつつみ、そのうたれたる創痕をいやしたもう日には、月のひかりは日の光のごとく、日のひかりは七倍をくわえて七の日のひかりの如くならん。

【ヨハネ1】

¹太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。²この言は太初に神とともにあり、³万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。⁴之に生命あり、この生命は人の光なりき。光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。……⁹もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。¹⁰彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。¹¹かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。¹²されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。……¹⁴言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。

●伝道五十周年

明けましておめでとうございます。昨年中はいろいろありがとうございました。本年もあいかわらずよくお願いいたします。年賀状をいろいろいただいておりますが、とても私は書ききれないので、皆さんのような親しい方には大方ご返事を失礼しておりますが、ここでお目にかかって、ご挨拶ただけで申し訳ありません。しかし、私は、印刷だけでなく何かお書きになっている年賀状には、ちゃんと拝見して、返事は書けなくてもごく一瞬間でも祈ってご返事しているわけです。

今年は、秋に私の伝道の五十周年を迎えるわけで、今年に対する私の気構えは非常に別なものがあります。聖書を今年は、やはりこの第十巻の『聖書は大ドラマである』（1988年刊）にそって、創世記から所々を選びながら進んでいこうと思います。この第十巻を終わるまでやらない前に、おそらく私は天界へ行ってしまうと思えますけれども。まあ始め地獄を通るかもしれませんが。

今日は創世記第1章、特に、

「光あれ」

という句を中心にやります。私は日本の国旗が大好きです。元日の朝、国旗を掲げて、元日、二日、三日まで掲げっ放し。そんな人はおそらく東京中にいないかもしれない。私の小さい時は多分、三日まで掲げていたと思います。昔のそういった想い出もありますし、それから、日本の国旗に対する日本人のまちがった気持、これに対する戦いの意味もある。国旗を掲げると、なにか軍国主義や国粹かのようにややもすると思う方々があります。そう



いった日本の歴史の中の或る場面もありましょう。けれども、本来、太陽がなければ地球はない。地球は太陽に絶対に依存している。その太陽に対する気持は私の信仰に完全にアナログアにつながっている。類比的につらなっているわけです。そういう意味で、日本の国旗、日の丸は私の信仰の告白でもあります。

●「1月1日 天地の創造」

著作集第十巻の「1月1日 天地の創造」の所を読みます。

「元始に神は天地を創造した。」(創世記1:1)

聖書は神の啓示の書、超科学の書である。聖書は永遠に実在する神が、古代ヘブライ(イスラエル、ユダヤ)人に体感させた行為と言葉の劇的現実を伝えている書である。

天地の創造によって宇宙(空間)に歴史(時間)が始まった。

創造以前は無時間、超空間です。神は、我々の側からは絶対に見えない、聞こえない、分からない。神さまが顕現しない限りは、我々には神は永遠に不可知です。だから、隠れたる見えざる神が、聞こえざる神が声を発する、現象してくる。それで初めて、神に対する我々の完全に受け身の認識が始まる。創造という神の行為がこの宇宙を空間とし、また時間を時間とすることになったわけです。それが即ち宇宙と歴史である。

だから、歴史と言いましても、これは本来、神の歴史です。創造の業はもちろん、神の愛の意志によるところのものです。歴史に始めがあると終わりがあある。原因があつたら結果がくる。これは聖書がはつきりと示していることで、創世記があつて黙示録があるゆえんです。

この歴史には元始(アルパ)があつたから終末(オメガ)がやってくる。聖書の創世紀がその元始を語り、黙示録がその終末と新天新地の到来を預言している。

私たちの人生は壮大な性格をもった人生です。ところが一般には、そういうことは全然関係ないですね。テレビでいろいろな人の話を聞いていると正直、情けなくなる。だから、いよいよ、聖書を身をもつて、どなたでもそれぞれの方法をもつて証しすることが私たちの義務であり光栄であるということをつくづく思います。あなた方も決して遠慮することはない。そうすると、必ず力が来る。

●安息日

創世紀第1章(1・1〜2・3)を見ると、神は六日間で創造の業^{わざ}を成して第七日目に安息した。

もちろんこれは、「六日」だの「七日」だのというのは神話ですけど、神話的な表現で素晴らしいことが言われている。七日目毎に日曜がくるのはここからきているわけです。「日曜」というのは日の、太陽の日なんだ。それを太陽抜き^{サウナ}の在り方をしてる人が大方で



ある。大体、日本は「天照大神」^{あまてらすおおみかみ}と言つて、太陽が人格化されているところの神話から始まっている。

この神話的表現から七日目毎に神との平安に入る安息日を迎えることになった。

我々は神から「シャーローム」「平安」を与えられる。平安の世界には、平安の境地には必ず力がくる。力がなければ本当の平安はない。ボヤツと休んでいるわけではないですから。私たちが聖書を読むことが直ちに力となるわけです。

●まことに結構

ところで、神は創造の業の一つ一つを見て「善し」（文語訳）、「良し」（口語訳）とした。

原語（ヘブライ語）では「トーブ」だが、この語はこの場合は善悪良否の判断ではなく、「結構だ、わが意を得た」という意で、「美^よし、好^よいかな」という善悪の彼岸的な神意と私は見る。

「よし」というのは、

「ああ結構だ、わが意を得た。その通りだ、私の思っているとおりだ」

という内容だと私は思う。いわゆる道徳的な善悪でも法的な正邪でもない。ヘブライ語の達者な人が私のこの訳を見て、

「先生はまるでユダヤのラビみたいだ。その通りです」

と言った。私は直観的にそう思ったわけですが。

「まことに結構だ」

と。結構な、神の意のままになっている、御意が現れている、聖意がそこに現象しているということ。神意が現象している世界に対して、横からじゃまを入れたサタンがいる。そのサタンの手下になったのがアダムとイブということ。創世記に書いてあるとおりです。

樂園喪失（パラダイス・ロスト）以前の創造の神品であるからだ。因みに、「美」という漢字の構成は大羊で、大きな羊の毛は美しいという美観に由来している由。創造の天地は正に美しかったのである。その第一の業は「光あれ！」で即「光があった」。光は宗教界の神秘的根源現象である。キリストや釈尊、聖者高僧の後光は靈界の光、元旦の旭光は自然界の光。我らも全身光に貫かれよう！

●美しい

この場合の「よし」というのは「美^{うる}わしい」と書いたらいい。日本の自然は非常に美^{うる}わしい。日本人は、むしろそういう意味で福音を受けとるには、非常に直線的な、素直な情感を持っているはずなんです。「美談^{うたな}」というでしょ。私たちが小学校の時にはよく美談を聞いた。魂や心の非常に美^{うる}わしいことです。善悪という判断よりも、この美の方がもうひとつ上なんだ。カントの哲学でも実践理性批判のあとから判断力の本当の芸術の世界が展開してい



る。

「美」という字は大きな羊なんです。大きな羊の羊毛は美しい。それが我々の洋服のもとになっている。イギリスの服地が素晴らしいのはあの羊毛が素晴らしいからです。昔から英国製の洋服が一番いい。羊毛の美しさから「美」という字ができた。

漢民族というのは素晴らしい。漢字は世界最高の文字です。あなた方は、漢字の味をよく知ってくださいよ。略字なんかだめだから。「めぐみ」という字もよくこの頃略しているからだめだ、ちゃんと「恵」と書かなくては。「恵」なんて書かれると、私はなにか間がぬけてしまう。

神さまの独子であるキリストのことを「羔」という。これは羊を火で焼く。火で焼いておいしい羊は小羊であるというわけで、「羔」という字ができた。

●光あれ

では、創世記に入ります。

1 元始に神天地を創造たまえり。2 地は定形なく曠空して黑暗淵の面にあり、

神の霊水の面を覆たりき。3 神光あれと言いたまひければ光ありき。

「神の霊、水の面を覆いたりき」とある。地球は水星だ。大半、水なんだ。いくら大陸があったって、太平洋と大西洋にはかなわない。ところが、神の霊が水の上を覆っていたという。こういうのを冥想しただけでも、これは大変な宗教哲学だな。

「神、光あれと言いたまひければ光ありき」

とある。

「エヒー オール ワエヒ オール」

というヘブライ語ですが。「ハーヤー」という「存在する」という字です。

「光が存在するようにと神さまが叫んだら、そうしたら存在した」

と。そのことが起きた。宗教界でも自然界でも光がなんといつても一番根本です。光を尊重しない宗教なんてありはしない。「光」という漢字は太陽の光線からできた。

「神光あれと言いたまひければ」と言ったって、それは聞こえはしないよ。神さまの根源語はヘブライ語でもギリシヤ語でも何語でもない。音楽みたいだ。神さまがなにかウワツと仰った、その音楽的な響きがヘブライ人には「エヒー オール」と聞こえたわけだ。そして、この創世記をみるというと、光のうちの光は太陽です。そのことが出ている。

14 神言いたまひけるは、天の穹蒼に光明ありて昼と夜とを分かち、又天象のため時節のため日のため年のために成るべし。15 又天の穹蒼にありて地を照す光となるべしと即ち斯くなりぬ。16 神二つの巨なる光を造り大なる光に昼を司らしめ小さき光に夜を司らしめたもう。また星を造りたまえり。

とある。日と月です。月は科学的に言えば太陽の反射だから。ヘブライ語では太陽のこと



を「シエメシュ」という。光は「オール」です。サムソンは「シムソーン」というんですが、「太陽の子」という意味です。ギリシヤ語では「ヘリオス」という。「光あれ」と言っても、光は実体をもっている。光の本体はこの太陽です。漠然と光があるのではない。何が光っているかという、太陽が光っている。

●キリストは神の光

聖書の光の箇所を引つ張りだしたらきりが無いから止めますけれども、著しい所を見ましょう。イザヤ書60章。

「起きよ、光を^{はな}発て、なんじの光きたり、エホバの栄光なんじのうえに照り出でたればなり。」(イザヤ60・1)

これはもう福音ですね、60章1節は。旧約でも何でもすぐキリストにあてはめてもらいなさいよ。

「なんじの光、キリストがやってきた。キリストの栄光がなんじの上に照りいでた」と。はやい話が、正にキリストは神の光であることはヨハネ伝第1章を読めばいい。

「^{はじめ}太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。^{ことば}この言は太初に神とともにあり、³万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。⁴之に生命あり、この生命は人の光なりき。

この4節です。

光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。

「これにかなわなかった」という訳もある。

……⁹もろもろの人をてらす^{まこと}真の光ありて、世にきたれり。¹⁰彼は世にあり、

世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。

「世」とは罪の世のこと。

¹¹かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。

イスラエルにやってきたのに、己の民イスラエル人はこれを受けなかった。

¹²されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。

キリストを受けとれば、どこ人であろうと、これは神の子だと。

¹⁴言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に

父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。」(ヨハネ1:1-14)

「栄光」とは「ドクサ」という字ですが、これは光と同じです。要するに、キリストは神の光、光体です。太陽は自然界の光体だ。人間界の光体はキリスト。お釈迦さんではない。それはもうキリストは正直、ケタ違いです。これに比べるものは絶対がない。完全に無比なひとだね。大変な^{ひと}霊止だ。キリストというひとは影のないひとだ。我々はみな影がある。キ



リストは自分が光体だから、影をつくろうとしたって作れやしない。自分が光っているんだから。

「神光あれと言いたまえば光ありき」

というのは、神さまの言は必ず現象する。そして、実体となる。光があつた。

●光たれ

ところが、今度は別な言葉がある。「光あれ」でなくて

「光たれ」

という言葉が。

「光であれ。お前は光でありなさいよ」

と。「光にてあれ」が「光たれ」になる。我々にキリストが「光であれ」と仰ったかと思つたら、キリストはもうひとつ先を言われた。

「汝らは世の光なり」

と。「光であれ」ではなくて今度は「光である」という。

「お前たちは世の光であるぞ」

と。ちよつとも光でない我々に向かつて「汝らは世の光なり」とは大変なことだ。これは完全に恵みの言葉です。恵みのことなんだ。現実でないやつにむかつて、お前は光だと。

「私を受けなさい。そうしたら、お前は光だぞ。私がお前の中に入るぞ」

という。だから、光であるキリストを中に入れないことにはダメなんだ。

「われキリストのうちに」(エン・クリスト)

あるいは、

「キリストわがうちに」(エン・エモイ)

ということ。その相互関係、相互内住関係、これが本当の現実です。信仰の本当の現実はそのなんです。それを別な言葉で一如という。一如的存在である。

「我が汝か、汝が我が」

が分からない。

「我は即ち汝なり、汝は即ち我なり」

ということ。

●我は罪びとの首

この世界は、

「どの人がより結構である」

とか「より素晴らしい」とか、そんな人間の相対関係の比較なんていうものではない。善いも悪いもない。



「あの先生は立派だが、小池先生はだめだ」

なんて。ええ結構です、私はだめです。だめなやつに本ものが入ってくる。パウロは、

「我は罪びとの首^{かしら}」

と言った。内村鑑三もそう言った。

「私が救われた。だから万人が救われるんだ」

と。第三番目の罪びとの首は小池だ。

「私がこんなに素晴らしい世界に入れられたから、誰でもが入れられる」

と、こういうわけだ。相対的な価値なんか、そんなものは問題にしてない。本当だよ、これは。だから、凄い力がくる。

「自分がもう少しこうなれば」

とか、そんなことを考えているうちは、いつまでたつてもだめなんです。

「そんなものは棄ててしまえ」

と言うこと。人に棄てられたけれども、自分自身で棄てている。人に棄てられて神に拾われた。私は自分自身を棄てざるを得ない。そうするとキリストはこれを拾わざるを得ない。キリストは私に、

「よし、お前は自分を棄てたな」

と言われる。ところがどっこい、

「本当に棄てているか」

と聞かれるよ。

「はい、私はあなたの十字架で棄られました」

と私は答える。十字架で棄てられているから、「棄てる」ということが言える。

「自分で自分を棄てました」

なんて、本当は言えるかという。十字架上に棄てられているんだから。そうしたら、復活のキリストが聖霊をもつて私を生かした。どんな嵐も、どんな人の取り扱いも、どんな悪口も、全然問題にならない世界に入ってしまった。これが本当の救いというものです。即、受けとってくださいよ、そういう現実を。

「そうですか、私はまだなかなかです」

なんて、「まだなかなか」ではない。直ぐだ。

「今ここに於て直ちに」

という現実だ。

●召団の信仰の神髄

「十二召団」の信仰の神髄はそこにある。それが嫌なら、もう十二召団を辞めていいよ。私は独りで構わない。なにも数なんかを問題にしているんじゃない。



「先生は聖霊の人だから五千人くらい会員がいてもいいのに、十二召団の数はまだ少ないではないか」

なんて或る人が言った。

「そんなことは問題にしてない」

と私は答えた。数ではない。本当に質だ。ただ一人の本ものが出れば、それでいい。人間の考え方、表現の仕方は様々でございます、結構でございます。信仰の表現でも様々でいい。ただ本当の中心は、

「然りと本当に受けとっているか」

ということ。それだけのなし。神経を本当に太くしてくださいよ。とにかくクリスチャンは神経質過ぎるよ、細かすぎる。まあ、85歳にもなって、やつとこういうところに到達したんだから、あなた方もそう急ぐことはないけれども。しかし、

「もう、すぐ受け取りました」

と言うなら、それで結構でございます。今に光って見えなくなるよ。

「汝は世の光なり」

「アーメン」

と。超一流の坊さんたちにはなにか光が射していた。その通りです。いいですね。そうしたらば、もう楽になってしまう。

●我はキリストの光

「光」という言葉はイザヤ書にはいくらかでもある。詩篇にもある。詩篇27篇に、

「エホバはわが光、わが救なり。われ誰をおおそれん。エホバはわが生命の

ちからなり。わが懼るべきものはたれぞや。」(詩篇27・1)

「キリストはわが光、わが救なり。われ誰をおおそれん」

ということ。もうひとつこの言葉を、

「我はキリストの光なり」

と読みかえる。

「私はキリストの光です」

と。あなた方は見えないかも知れないけれども。相対的人間小池がどうだこうだと、そんなことではない。

だから、私は日本の国旗を、日の丸を一年中あそこに掲げておいてもいい。まあ、それはしないけれども。私自身が太陽になればいい。私自身が国旗になればいい。

「心に太陽を持て」

ではなくて、

「全身が太陽であれ」



ということです。そういう極限のところの世界はもう今までの表現ではできない。ドイツ人だってびつくりするよ、正直。

●もつと光を！

ドイツ人といえば、ドイツの第一人者は誰かというと、ゲーテです。このゲーテという大詩人は太陽が好きでしょうがない。時計の針が長針も短針も中天を指した時に、オギヤーといって生まれたんだ、ゲーテは。だから、自分のことを「ゾンネンキンテ」「太陽の子」と言っている。最後に死ぬときも、

「もつと光を！」（メーア リヒト！）

と言った。カーテンを開けて、もつと光を入れてくれと。これが最後の言葉です。

「光より出て光へ入る」

という。ゲーテのお母さんがまた光のような婦人であつた。非常に明るい。誰をも愛し、誰からも愛された。人の悪口は言わない。女性は本当に歴史を作るんですよ。偉い人のお母さんの魂はみんないい。「男女同権」なんかそんなことを言って、ゴタゴタ言っている必要はない。天国では女性の方が上位だ。

私の母は光子といったが、それが失明してしまった。天界で今はもう明るくしておられるでしょう。1月19日が命日だけれども。この母のことを思うと私はもう言葉にならない。母の苦難というものは、全部私は身を感じていますから。

日本に限らず、ゲルマンもインドもエジプトもみな太陽神をもっている。大体、太陽を拝むことはひとつも悪くない。ゲーテ自身が、

「無条件に私は太陽に拝跪する」

といった。おもしろいね、ゲーテは。

「キリストにも無条件に自分は拝跪する」

と。どのクリスチャンがこんなことを大胆に言えるかというんだ。凄いやつですよ、ゲーテというのは本当に。だから、

「神―大自然―我」

というのが融合している。いい意味において、「女性」もそうです。彼はもうそれが融合している。大きな光の魂だ。ゲーテだって人間だから躓いたり転んだりしたよ。いいよ、そんなことはどうでも。

●弥陀の本願

今年は午の歳だね。天馬空を行くという。しかし、嫌な言葉もある。「意馬心猿」という。人間の持っている情欲というものはどうにもならんものだという言葉です。これに打ち勝てない。だから、ダンテも『神曲』で豹が出てきたときに退いてしまった。



親鸞も非常にそれで苦しんだけれども、それをやっぱり突破したから、親鸞も光ってしまつた。

(歎異抄第一条)「弥陀みだの誓願せいがん不思議にたすけられまいらせて、往生おうじょうをばとぐるなりと信じて、念仏ねんぶつまうさんとおもひたつころのをこるとき、すなはち摂取せつしゅ不捨ふしやの利益りやくにあづけしめたまふなり。

彌陀の本願には老少善惡ぜんまくのひとをえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし。そのゆへは、罪惡しんじゅう深重ぼんのうしじょう、煩惱熾盛しゆじょうの衆生をたすけんがための願にたまします。しかれば本願を信ぜんに、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆへに。惡をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへにと、云々。」

素晴らしい言葉だね。弥陀の本願を妨げるいかなる惡もない。弥陀の本願、慈悲は全部これを救い上げてしまう。

● 罪びとを招かん

キリストが正にそれです。

「我は罪びとを招かんとて来たり」

と、キリストは言う。いわゆる善人なんかには用はないところ、本当の意味で善人なんかありはしない。だから、歎異抄を読んでも、キリストの光で読めばキリストの恩恵の素晴らしさがよくわかる。歎異抄というのは、親鸞の信仰は素晴らしい。バルトが驚いたという。

イザヤ書30章26節におもしろい言葉がある。

「²⁶かくてエホバその民のきずをつつみ、そのうたれたる創痕いたでをいやしたもう日には、月のひかりは日の光のごとく、日のひかりは七倍をくわえて七の日のひかりの如くならん。」(イザヤ30・26)

月の光が日の光のごとなり、日の光は太陽が七つあるようなことになるぞと。こういう言葉があつたかと思つてびつくりした。靈光の素晴らしいところです。照々然として光る。現象的に身边に光が射すのをよく昔の画家は描きますね。あれは本当にそれが見えたんだからね、後光が。光の環わです。

● 原点は十字架

要するに、「宇宙の大靈」と言おうが何と言おうが、神は光の奥の光、無光の光の世界だ。無相の相であるし、それが光として現象する。だから、神さまはもの凄い光だが、その光が今度は現象体として現れてくる。それが創造なんだ。手で作ったような創造ではない。本質がそこに現象してくるわけだ。

いつも原点は同じです。十字架です。本当に十字架で過去・現在・未来の自分が片づい



ている。その現実には聖霊が臨んでくるから、相対的な現実には問題にしない。そうすると、
 どんどん力が来て、光が来る。そして、光の性質は生命であると同時に愛である。

愛するとは相手を命づけること。相手を救うこと、助けること、命づけることが、これが愛だ。可愛がることではないんだ、愛というのは。

よく人は、

「回心した」

と言うが、私は「回心」ではすまないんだ。回身です、身を回らさなければ。全存在をめぐらさなかったらば、心だけでは本当の救いにはならない。こういう「回身」という字を書いた人はおそろくないでしょう。

「回身せよ」

ということですよ。キリストで回身させられてしまった。身体を、全存在をひるがえらされてしまった。もう、烈々たるものが来ているから。

●詩「マッチ売りの少女」

ところで、そういう烈々たる世界とはまた非常に違った世界のことですが、私は歳の暮れになると、アンデルセンの童話の「マッチ売りの少女」を時々思いだす。こないだちよつと思ひ出して詩にしてみました。これは「卯の花の匂う垣根に」の曲で歌える。(独唱)

召団讃歌D3「マッチ売りの少女」

――アンデルセンの童話に因んで――

(1989年12月29日作 小山作之助作曲「夏は来ぬ」の曲で)

- 1 雪吹雪く
街人に
素足のままの
マッチをひさぐ
乙女子
- 2 買う人の
やむを得ず
寒気のみ
家のほごまに
蹲る
- 3 「おお寒い
乙女子は
手を火にかざす
マッチを擦ろう」
- 4 また灯す
また灯す
見えしは夕餐
歩み来たり
- 5 また点す
また点す
現れたるは
その灯火は



み空の星と のほりゆく

6 星一つ 空より隕ちぬ

「誰かの死」 祖母の言を

思い出して 火を点す

7 「おばあちゃん 伴れて伴れてよ

天国へ 伴れてちようだい！」

マッチを擦りつづけ叫びたり

8 明けそめぬ 年の始めは！

雪（往き）まくら 笑みの乙女の

美しき幻影 誰か知る

私はこれを中学のときに英語で読んだ。その時にも涙を流したね。そんなことで不思議な歌ができてしまった。

とにかく、我々はキリストの限りなき底抜けの愛で力を、光をいただいて、今年は光の子として展開していきます。おわります。

● 祈り

祈ります。創世記第1章の一角を承り、ありがとうございます。驚くべき光の存在、光体であられるところの主さま、私たちはあなたの中に飛び込んで、光とせられ進んでいきます。

「我はキリストの光なり」

と無言の言葉をもって進んでいきます。あなたの絶対恩寵の中を本当に救われつつ、また人に本当の光を与えつつ、助けつつ進んで行きたく存じております。十二召団はそれぞれですが、しかし、十字架は一つ聖霊は一つです。どうぞ、この一点において本当にいよいよ深められ、それぞれの自在さをもって進ましましたまわんことを願いたてまつります。

今、この東京召団も大事な年を迎えましたが、兄弟姉妹たちの主にある友情に支えられて、僕も喜んで進んで行きます。兄弟姉妹たちのそれぞれの所においていろいろの課題がありますが、どうぞ、それをあなたが御名の故に全うしてくださるように願ひ奉ります。そして、病める人たちをどうぞ助けてやってください。必ずあなたは最大の医者であることを信じて、あなたの中に自分を投げ入れるときに、驚くべき力がくることを体験せしめてくださるように願ひ奉ります。

尽くしませんが、御前に感謝と賛美を兄弟姉妹たちのそれと共に御名に在って捧げ奉る。アーメン

